D 中国書道史　人物・作品解説

※人物は、生没年に関わらず、主な作品を残した時代を優先して掲げた。

※人物の作品は、教科書本文に掲載のものを優先として、代表的なものを掲げた。

- 殷時代
- 周（西周）時代
- 春秋・戦国時代
- 秦時代
- 漢時代
- 三国時代
- 晋時代
- 南北朝時代
- 隋時代
- 唐時代
- 宋時代
- 元時代
- 明時代
- 清時代
- 近代・現代

殷時代〈紀元前 16 世紀頃― 紀元前 11世紀頃〉

甲骨文【こうこつぶん】殷時代

占い等の内容が記録された、中国で最も古い文字。祭政一致の殷王朝の王が、祭祀や天候、収穫、戦争などについて、占いで神意を尋ねた記録が、亀甲や獣骨に鋭く彫り込まれている。1899 年、現在の河南省安陽市で漢方薬として売られていた「龍骨」に文字のようなものが刻まれていることに、金石学者の王懿栄が気づいたと言われている。その後の調査で、安陽市の北西にある殷墟から数万点の甲骨文が出土した。

ColBase：甲骨

小臣艅犠尊【しょうしんよぎそん】殷時代

犀をかたどった青銅器で、内部に 4 行 27 字の銘文が鋳込まれている。甲骨文の特徴を残しつつ、やや右上がりな横画の字形など、西周時代初期のような金文の特徴も見られる。アジア美術館（サンフランシスコ）蔵。

アジア美術館（サンフランシスコ）：小臣艅犠尊

周（西周）時代〈紀元前 1050 年頃―紀元前 770 年頃〉

婦閑卣【ふひんゆう】 西周時代・前 10 世紀

酒を温めるための青銅器である「卣」に、銘文が鋳込まれている。西周時代は青銅器が盛んに作られ、はじめは「婦閑卣」のように図形のような文字が数種類あるだけだったが、次第に字数が増し、線の太細や字形も整っていった。台東区立書道博物館蔵。
※「ひん」は門がまえの中に豕を三つ

大盂鼎【だいうてい】西周時代・前 10 世紀

食物の煮炊き用の青銅器である大型の「鼎」に、291 字の銘文が鋳込まれている。殷時代の書風を残しつつ、字形や点画は安定し字間・行間も整っている。字形は左右相称を意識した縦長であり、線は紡錘形に書かれたものが多く、太めである。肥筆とよばれる太く塗りつぶしたような点画も多い。この時代は青銅器が盛んに作られ、その書風は国や地域ごとに大きく異なっている。中国国家博物館蔵。

小克鼎【しょうこくてい】

西周時代・前 10 世紀～前 9 世紀

食物の煮炊き用の青銅器である「鼎」に、罫線も併せて銘文が鋳込まれている貴重な例としても知られる。線の肥瘦の変化は少なく、字形や字間、行間も整っている。

散氏盤【さんしばん】西周時代・前 9 世紀～前 8 世紀

水を張るための青銅器である「盤」の内底に、およそ 350 字の銘文が鋳込まれている。矢国による散国侵略が失敗し、逆に矢国が領地を割譲することになったため、散国がその功績を後世に伝えるために制作した盤である。両国の領地の境界線などの契約が記されている。大小さまざまな文字の大きさや字形のゆがみ、傾きのある点画が素朴でおおらかな表情を漂わせている。國立故宮博物院（台北）蔵。

國立故宮博物院（台北）：散盤

王孫遺者鐘【おうそんいしゃしょう】 春秋時代

湖北省宜昌市より出土したと伝えられる青銅器の「鐘」。春秋・戦国時代になると、諸国で独自に青銅器が作られたため、書風に地方色が表れた。南方地域では、「王孫遺者鐘」や「中山王譽方壺」のように脚部の長い装飾化された文字が見られた。アジア美術館（サンフランシスコ）蔵。

アジア美術館（サンフランシスコ）：王孫遺者鐘

越王勾践剣【えつおうこうせんけん】

春秋時代・前 5 世紀

越国の王「勾践」が保有していた名剣である。青銅製の刀剣に金銀の菱形文様の象嵌があしらわれている。当時、越国などの中国南方地域では脚部の長い文字や装飾化された文字が見られた。「越王勾践剣」の文字は、鳥の姿を装飾化したことから「鳥篆」とよばれている。湖北省博物館蔵。

中山王譽方壺【ちゅうざんおうさくほうこ】

戦国時代・前 314 年頃

現在の河北省平山県から出土した四角い壺（方壺）。この当時の中国南方地域から出土した青銅器は、脚部の長い文字や装飾化された文字が特徴的で、特に「中山王譽方壺」は縦長な字形で線が細く、収筆は針のように鋭く引き抜かれている。河北省文物考古研究院蔵。

郭店楚簡【かくてんそかん】戦国時代

1993 年に現在の湖北省荊門市から出土した竹簡。804 枚中 730 枚に文字が書かれ、戦国時代の楚国から出土した竹簡としては最多である。書かれている内容は道家系『老子（甲本・乙本・丙本）』、『太一生水』や儒家系の文献などで、文字は鮮明である。荊門市博物館蔵。

石鼓文【せっこぶん】戦国時代

戦国時代の秦で作られたとされる、現存している最古の石刻文字。太鼓のような形をした 10 個の石からなり、猟などについての詩が大篆で刻されている。線の太さはほぼ一定で、字形も殷・周時代の金文に比べ簡潔に整理されている。秦時代の篆書のもとになった様式といわれている。石鼓は現在、故宮博物院（北京）が所蔵している。

故宮博物院（北京）：秦石鼓

楚帛書【そはくしょ】戦国時代

湖南省長沙市から発掘された帛（絹）の断片。戦国時代の楚国の日常的な書体で書かれ、扁平で南方地域特有の曲線的な字形である。フーリア美術館（ワシントン）蔵。

TOP

秦時代〈紀元前 221 年―紀元前 202 年〉

雲夢睡虎地秦簡【うんぼうすいこちしんかん】

戦国時代末期～秦時代初期

湖北省雲夢県の睡虎地にて発見された竹簡。「秦隷」とよばれる当時の日常的な書体で書かれ、「里耶秦簡」と同じく 2 画で書かれた転折や、伸びやかな収筆から隷書の趣が見られる。

詔版【しょうばん】秦時代 · 前 221 年

秦の始皇帝によって統一が図られた、度量衡の宣文 40 字の文を銅版に彫ったもので、木製の枡に貼り付けて使用された。直線的な小篆で書かれているが、文字の大小や点画の長短に変化があるなど自由な雰囲気が感じられる。

権量銘【けんりょうめい】秦時代 · 前 221 年

秦の始皇帝によって統一が図られた、度量衡の基準となる権（分銅）と量（枡）の銘文。詔版と同じ内容で、直線を主体とした簡素な構えは共通である。詔版や権量は大量に作られたため、さまざまな書風のものが見られる。

里耶秦簡【りやしんかん】秦時代

湖南省里耶古城址から発見された、約 3 万 7 千枚の木簡で、紀元前 221 年以降に書写された秦時代の公文書である。当時の日常書体と考えられている「秦隷」で書かれ、「雲夢睡虎地秦簡」と同じく隷書の趣がある。

琅邪台刻石【ろうやだいこくせき】秦時代

山東省諸城県琅邪山に秦の始皇帝が建て、二世皇帝胡亥が追記した石碑。保存状態が悪く読みにくいが、「泰山刻石」と同じく小篆の作として有名である。現在、刻石は中国国家博物館が所蔵している。

泰山刻石【たいざんこくせき】秦時代

秦の始皇帝が天下を統一した後、各地を巡行し著名な山々に建てた、秦の徳をたたえた碑。「琅邪台刻石」と同じく小篆の作として有名である。文字の統一を図った始皇帝によって小篆が定められ、「泰山刻石」と「琅邪台刻石」は丞相の李斯の書と伝えられている。もとは 200 文字以上が刻されていたが、現在は 10 文字のみが確認できる。刻石は山東省泰安市の岱廟に一部現存している。

ColBase：泰山刻石

長沙馬王堆帛書【ちょうさまおうたいはくしょ】

前漢時代

湖南省長沙市馬王堆から出土した、帛（絹）に書かれた書。小篆の字形ながら収筆には伸びやかな波勢が見られ、隷意を交えた文字や古隷で書かれた文字が見られる。

漢簡【かんかん】（敦煌・居延など）漢時代

20 世紀前半、オーレル・スタインやスウェン・ヘディンらによる中国西域の調査によって、エチナ川流域（居延）や敦煌、楼蘭などから 1 万点を超える簡牘（竹簡・木簡）や残紙、帛書などが発見された。最前線の基地における公文書から個人的な書簡など多岐にわたり、文字には隷書・草書・行書の姿が見られる。肉筆特有の伸びやかさや変化に富んだ文字で、当時の文字の実態を知る上で貴重な史料。

封泥【ふうでい】前漢時代

竹簡や木簡に書かれた文書や器物に封をするため、粘土の塊に押印したもの。書面に検という板の蓋（封検）をして縛り、結び目に粘土を置き押印する。封泥の官職名などが記された印文により、文書は正式な権威をもつものとなる。

魯孝王刻石 【ろこうおうこくせき】

前漢時代 · 前 56 年

山東省曲阜の孔子廟を修理した際に発見された。「五鳳二年刻石」ともよばれる。当時の日常的な書体の一つである「古隷」で書かれている。「年」の最終画を伸ばして書くなど、同時代の竹簡や木簡とも同じ書き方が見られる。

瓦当文【がとうぶん】前漢時代

瓦当とは、屋根の軒瓦の先端部分をいう。漢時代は円形の瓦当が多く、「千秋万歳」「長楽未央」などの吉祥語や年号などの文字が記されている。それらの文字は篆書を基調とした装飾的な字形であり、これらを総称して「瓦当文」とよぶ。

萊子侯刻石【らいしこうこくせき】新時代 · 16 年

清時代に山東省鄒城市で発見された刻石。萊子侯が一族のために土地を封じた功績を、後世に残すようにと戒めた内容が書かれているといわれている。直線的で簡素な古隷で書かれ、5 字 × 7 行の 35 文字が刻されている。全体的に素朴な雰囲気を見せているが、行間の界線が全体を引き締めている。

開通褒斜道刻石【かいつうほうやどうこくせき】

後漢時代 · 66 年

現存する最古の摩崖。不通になっていた褒斜道を開通させた漢中の太守の功績をたたえたもの。陝西省褒城県北の石門（トンネル）南方の山崖にあったが、現在は崖からはがされ、漢中市博物館に保存されている。書体は古隷で波磔は強調しない。ゆったりとした運筆で、字形は懐を広くとったおおらかな方形。文字の大小の変化に富んだ、素朴な雰囲気である。横幅約 270cm の 16 行に及ぶ壮大な書。

石門頌【せきもんしょう】後漢時代 · 148 年

漢の司隷校尉であった楊孟文が、石門道を修理したことをたたえて刻された。現在は「開通褒斜道刻石」や「楊淮表紀」などとともに、陝西省の漢中市博物館に置かれている。摩崖だが文字の大きさが統一され、書体は八分でありながら線の肥瘦の変化が少なく整然とした表情が感じられる。

乙瑛碑【いつえいひ】後漢時代 · 153 年

朝廷から魯の国の大臣を務めた乙瑛に、魯の孔子廟に百石卒史を常置し廟を守らせることが許可された経緯や、それに関わった人物をたたえた内容が刻されている。重厚でゆったりとした八分で書かれている。

ColBase：乙瑛碑

礼器碑【れいきひ】後漢時代 · 156 年

魯の宰相の韓勅の徳政をたたえて建てられた碑。韓勅は孔子廟を修理したり、祭礼用の器を整えたりするなどの徳政を行った。隷書の八分の代表的な作品の一つで、細いながら強靭な線や三角形に強調された波磔、点画を等間隔に空けた（分間布白）整斉な造形が特徴である。

ColBase：礼器碑

TOP

漢時代〈紀元前 202 年—220 年〉

孔宙碑【こうちゅうひ】後漢時代 · 164 年

孔子十九世の孫である孔宙の徳をたたえて建てられた碑。両面碑であり、もとは孔宙の墓前にあった。「礼器碑」「史晨碑」「乙瑛碑」などと同じく山東省曲阜の「孔廟碑林」に現存している。整斉とした構えに、長く流麗な払いや波磔が強調されている。

西狭頌【せいきょうしょう】後漢時代 · 171 年

甘粛省武都郡の太守であった李翕が、郡内の西狭の道を改修した功績をたたえて刻された摩崖。漢時代の碑には珍しく書写した人物（仇靖）の名が刻されている。方形で懐が広く、おおらかな八分で書かれている。

楊淮表紀【ようわいひょうき】後漢時代 · 173 年

「石門」を通った卞玉という役人が、石門道（石門）を修理した楊孟文の功績に感動し、石門の壁に刻した摩崖。後漢時代の摩崖は整ったものが多いが、のびのびとして素朴な表情を見せている。

曹全碑【そうぜんひ】後漢時代 · 185 年

陝西省部陽県の県令（行政の最高責任者）で、黄巾の乱を鎮圧した曹全という人物の功績をたたえて作られた碑。流麗で息の長い伸びやかな運筆で書かれ、一字一波を基本としている漢時代の隷書の典型とされている。全体的に扁平な字形で横画は水平、縦画は垂直で書かれている。

張遷碑【ちょうせんひ】後漢時代 · 186 年

穀城（現在の山東省東阿県）の長であった、張遷の徳政をたたえて作られた碑。直線的で線は太く波磔は短く重厚、方形な字形が多く古朴でおおらかな書風が特徴である。

ColBase：張遷碑

鍾繇【しょうよう】151-230

鍾繇は魏の曹操、曹丕（文帝）に仕えた建国の功臣であり、能書であったといわれているが確かな作品は現存していない。「薦季直表」は鍾繇の名品とされている。

▶「薦季直表」三国時代 · 221 年

季直という人を曹丕に推薦するための上表文だと伝えられている。字形は扁平で、縦画は太く、懐を広くとった向勢の構えでゆったりとした運筆で書かれた小楷。

楼蘭出土残紙【ろうらんしゅつどざんし】

三国 · 西晋時代

20 世紀前半、オーレル・スタインやスウェン・ヘディンらによる中国西域の調査によって、エチナ川流域（居延）や敦煌、楼蘭などから 1 万点を超える簡牘（竹簡・木簡）や残紙、帛書などが発見された。文書は最前線の基地における公文書から個人的な書簡、経典など多岐にわたる。魏から晋時代にかけての楷書への過渡期を示す文字が書かれているため、当時の肉筆文字の実態を知るうえでも大変貴重なものである。楼蘭から発見された残紙のなかでは「李柏尺牘稿」が注目される。

天発神讖碑【てんぱつしんしんひ】

三国時代（呉）· 276 年

呉の徳をたたえるために作られた碑で、碑石が三つに断裂していたから、「三段碑」ともいわれる。篆書の字形をとりながら、隷書の運筆を見せている、起筆や転折を強調した類似を見ない書体である。1805 年に火災で壊れ、原石は現存していない。清時代の能書である呉譲之や、徐三庚によって再評価された。

ColBase：天発神讖碑

塼文【せんぶん】三国時代

建築材料のレンガである「塼」の表面に記された文字で、篆書と隷書を交ぜ合わせた表情が見られる。文字以外に文様が描かれた塼も見られる。

陸機【りくき】261-303

字は士衡。呉郡（現在の江蘇省蘇州）の出身で、後に晋に仕えた。詩文に秀で、文学論の『文賦』や詩集『陸士衡集』が著名である。また、書は行草書に優れていた。

▶「平復帖」三国時代

紙本に章草で書かれ、冒頭の「…恐難平復」から「平復帖」とよばれる。署名はないが、友人たちの消息が述べられ、陸機の作とされている。20 世紀初頭に大量に発見された「李柏尺牘稿」などの漢・晋時代の章草と共通する書法が見られ、伝来する西晋の作品としては貴重なものである。

故宮博物院（北京）：平復帖

TOP

李柏尺牘稿【りはくせきとくこう】

五胡十六国時代（前涼）· 328 年頃

1909 年に、大谷探検隊が楼蘭で発見した史料のうちの一つ。行書で記された手紙の草稿であり、西晋時代の肉筆史料として貴重なものである。同時代の王羲之の早期の作品「姨母帖」との類似が指摘されている。龍谷大学大宮図書館蔵。

王羲之【おうぎし】303 ? -361 ?

東晋時代に活躍し、書聖とたたえられた能書。東晋の豪族の家に生まれた。光州刺史などを経て右軍将軍、会稽内史を務め、その後も会稽にとどまり詩や書を書いて暮らした。唐の太宗がその筆跡をたいへん愛したことにより、書聖と仰がれた。中国や日本の漢字文化圏では第一の能書として現在に至るまで尊重されている。鑑賞や学習、名筆の目的として収集の対象となった王羲之の書は、真跡は失われているものの数多く作られた臨模や拓本によって伝わっている。

王羲之の書は「蘭亭序」に代表され、ほかに「十七帖」や「集王聖教序」「喪乱帖」「姨母帖」「快雪時晴帖」「孔侍中帖」「興福寺断碑」「黄庭経」などが著名である。日本には奈良時代に王羲之の書が伝えられ、光明皇后が臨書した「楽毅論」などが知られている。

▶「蘭亭序」東晋時代

永和 9 年（353）3 月 3 日の節句に、会稽山の蘭亭で文人墨客を招いた「曲水の宴」という詩歌の会を開いた際に詠まれた詩をまとめた詩集の序文の草稿である。古来、行書の手本として最も高く評価されている。真跡は太宗の所有となった後、欧陽詢、虞世南、褚遂良らによって複数の複製が作られた。その中でも、馮承素が双鉤塡墨の技法で作ったとされる「神龍半印本」は最も著名なものである。筆路がはっきりとして伸びやかな線で構成されている。流麗な線の中にも緩急の変化や筆圧の強弱が見られ、字形も変化に富んでいる。

故宮博物院（北京）：蘭亭序（神龍半印本）

▶「十七帖」東晋時代

王羲之の手紙 29 通を集めて石に刻し 1 冊の法帖にまとめたもので、拓本として伝わっている。冒頭に「十七日先書」とあることからこの名がある。起筆や転折部分が力強く押さえられ、緩急に富んだ用筆である。側筆を使った運筆で抑揚に富んでいる。

京都国立博物館：十七帖（宋拓）

▶「集王聖教序」東晋時代（建碑は唐時代 · 672 年）

長安の僧・懐仁が、太宗が所蔵していた王羲之の真跡から文字を集めて刻した集字碑で、672 年に建てられた。「蘭亭序」の行書を主体に、草書も交えてつくられた。王羲之の真跡は 1 点も現存しないため、王羲之の書風を伝える重要な古典である。

▶「喪乱帖」東晋時代

「喪乱帖」8 行、「二謝帖」5 行、「得示帖」4 行の全 3 種の手紙を、簾状の筋目のある料紙 1 紙にまとめ精巧に模写したものである。王羲之晩年の作とされ、奈良時代には日本に請来されている。もとは巻子本だったが、現在は軸装となっている。先祖の墓を荒らされ、心を痛めていることが書かれている。文字の骨格がしっかりとしており、穂先を利かせた鋭さと緩急のある堂々としたしなやかな運筆が特徴である。双鉤塡墨という、原本の作品の上を薄くすける紙で覆い、文字の輪郭を囲み取り、その中を墨の濃淡や潤渇にいたるまで忠実に塗り込む技法で作られている。模写したものとは思えないほど、王羲之の筆勢がうかがえる。皇居三の丸尚蔵館蔵。

皇居三の丸尚蔵館：喪乱帖

▶「快雪時晴帖」東晋時代

大雪の後に友人に送られた行書 4 行の短い手紙である。元時代の趙孟頫をはじめ、多くの皇帝や収蔵家の印記や跋がある。清の乾隆帝が熱愛し、王献之の「中秋帖」、王珣の「伯遠帖」と合わせて「三希」とよび、それらをはじめ名品を収蔵した小さな書斎を「三希堂」と命名した。國立故宮博物院（台北）蔵。

國立故宮博物院（台北）：快雪時晴帖

王献之【おうけんし】344-388

王羲之の第 7 子。字は子敬。中書令を務めたことから王大令の呼称があるほか、父の王羲之を大王、王献之を小王とよび、父子を並称して「二王」ともされる。幼年の頃から父について書を学び、行書・草書に優れ「中秋帖」や「地黄湯帖」「洛神賦」など数多くの書が残されているが、いずれも臨模など

TOP

で真跡は現存しない。

▶「中秋帖」東晋時代

連綿草で書かれた著名な手紙である。宋時代には「淳化閣帖」に刻入され、清時代には乾隆帝によって愛蔵され、王羲之の「快雪時晴帖」、王珣の「伯遠帖」などとともに「三希」の一つとされ、「三希堂法帖」にも刻入された。故宮博物院（北京）蔵。

故宮博物院（北京）：中秋帖

▶「地黄湯帖」東晋時代

「地黄湯」という薬についての行草交じり6行の手紙。唐時代の臨書とされ、宋時代には「淳化閣帖」に刻入されている。明時代に文徴明が所蔵した。台東区立書道博物館蔵。

台東区ヴァーチャル美術館：王献之・地黄湯帖

法句譬喩経巻第三残巻

【ほっくひゆきょうまきだいさんざんかん】

五胡十六国時代（前秦）・359年

隷書から楷書が発生する過渡期の書。楷書の筆法である三過折が備わっていない。「李柏尺牘稿」などと同じく、後漢時代から東晋時代にかけて簡牘から紙へと移行する過程の書であり、政治制度などの影響を受けながら段階的に変遷をとげた。

爨宝子碑【さんぽうしひ】東晋時代・405年

若くして没した爨宝子の徳をたたえて建てられた碑。「爨龍顔碑」と合わせて二爨碑とよばれている。当時の石碑に見られるような、線に太細の変化が少なく、堂々とした書きぶりである。直線的で力強く、楷書の構えをもちながら収筆は波磔のような隷書風の用筆が見られる。

ColBase：爨宝子碑

TOP

龍門造像記【りゅうもんぞうぞうき】北魏時代

中国を代表する三大石窟（敦煌莫高窟・雲崗石窟・龍門石窟）のうちの一つである、龍門石窟内に刻された、仏像の由来を記したもの。仏教が盛んであった北魏時代は、各地に多数の寺院や仏像が造営された。孝文帝は洛陽に都を移すと、郊外の龍門山に石窟寺院を造営し仏教の保護に努めた。その石窟内には多くの造像記が作られ、北魏時代の楷書を代表する鋭い点画や直線的な線、気迫あふれる力強い書風で文字が刻された。特に書に優れた 20 点を「龍門二十品」とよび、「牛橛造像記」や「始平公造像記」「魏霊蔵造像記」などの力強い書や、「鄭長猶造像記」のような素朴な書風などが挙げられている。この時代は石窟や自然の岩に刻された書が多く、その書風は日本の飛鳥時代から奈良時代の書や文化にも影響を与え、明治時代には「六朝楷書」として再興した。

UNESCO World Heritage Centre：龍門石窟

▶「牛橛造像記」北魏時代 · 495 年

牛橛という息子の冥福を祈って、母親が仏像とその銘文を刻ませたもの。龍門石窟の古陽洞内にあり、龍門造像記の中では最も古い。直線的な点画や右上がりの横画に統一感があり、角張った点画や力強い払いなど北魏時代の楷書の特徴が強く表れている。

ColBase：牛橛造像記

▶「始平公造像記」北魏時代 · 498 年

龍門石窟の古陽洞内にあり、比丘慧成という高僧が亡き父の始平公のために仏像一体をつくり、供養したことを記した造像記。1 字 1 字が格子状の枠に収められ、すべて陽刻である。北魏時代の楷書の特徴が強く表れ、肉厚で重厚な堂々とした線が特徴である。

▶「魏霊蔵造像記」北魏時代

龍門石窟の古陽洞内にあり、発願者の一人である魏霊蔵からこの名がついた。隷書の波磔のように収筆を右上へはね上げ、力強さの中にも典雅な趣が感じられる。

▶「鄭長猷造像記」北魏時代 · 501 年

龍門石窟の古陽洞内にあり、亡き父母と子のために鄭長猷が弥勒像一体をつくり供養したことを記した造像記。ほかの龍門造像記と同様に太く角張った点画ではあるが、隷書のように収筆を右上へはね上げる特徴がある。全体的に洗練された美しさはないが、素朴で野趣を感じさせる。

ColBase：鄭長猷造像記

鄭道昭【ていどうしょう】？ -516

現在の河南省開封に生まれ、孝文帝に仕えた。晩年には光州刺史を務めた。北魏楷書の角ばった「方筆」の用筆ではなく、「鄭羲下碑」や「論経書詩」などに代表されるように、丸みを帯びた「円筆」の書き方が特徴である。雲峰山や天柱山に摩崖が残されており、懐の広い字形と息の長い粘り強い線質が共通している。近代には、清の楊守敬の啓蒙により日本に六朝楷書がもたらされ、鄭道昭の書法は日下部鳴鶴や巌谷一六、中林梧竹などに影響を与えた。

▶「鄭羲下碑」北魏時代 · 511 年

鄭道昭が父鄭羲をたたえて、山東省掖県の雲峰山に縦 340cm × 横 360cm の巨岩に刻した摩崖。最初天柱山に刻したが摩崖があまりよくなく、雲峰山の石質のよい岩肌に刻し直されたものが「鄭羲下碑」である。先に天柱山に刻したものを「鄭羲上碑」とし、双方合わせて鄭文公碑とよばれている。丸みを帯びた円筆の点画は、ゆったりとして大らかで、鄭道昭独特の息の長い粘りのある線質が力強さと謹厳さを見せている。

▶「論経書詩」北魏時代 · 511 年

山東省掖県の雲峰山に、「鄭羲下碑」の上方の縦 450cm × 横 600cm の巨岩に刻した摩崖。神仙道の経書を論じた自作の五言古詩などが刻されている。一文字約 15cm の大字で書かれた楷書で、自由闊達で長い粘りのある力強い線質によって壮大な趣が感じられる。

▶「天柱山遊息題字」北魏時代

山東省掖県の天柱山に刻され、鄭道昭が自然の山々を楽しんでいる様子が刻されている。「天柱山遊息題字」は「鄭羲下碑」に見られる円筆の用筆とは異なり、直線的な線で構成されている。摩崖の書は自ずと大字で書かれ、文字相互の大小や点画の長短など、変化に富んだおおらかな表現を見せている。

TOP

張猛龍碑【ちょうもうりょうひ】北魏時代・522年

魯郡の太守（長官）であり、儒学の振興などに尽くした張猛龍をたたえた碑。龍門石窟などの造像記と同様に、北魏の楷書を代表する一つである。全体的に力強い筆勢で書かれ、右上がりの横画や先端まで筆力が行き届いた息の長い左払いが特徴である。

ColBase：張猛龍碑

高貞碑【こうていひ】北魏時代・523年

19世紀に、山東省徳県で出土した北魏時代の碑。高氏は山東渤海の豪族で、高貞の姉は宣武帝の皇后という皇室の外戚になる名門であったが故に、当時の一流の筆者が書いたと考えられる。「張猛龍碑」と並び、北魏時代を代表する楷書の一つである。細部にまで技法をこらした緊張感のある直線的な線質によって、厳格な雰囲気が感じられる。

TOP

美人董氏墓誌銘【びじんとうしぼしめい】

隋時代・597 年

「美人」という官職であった董氏が、若くして亡くなったことを悼んだ碑。南北朝を統一した隋では、洗練された楷書が隆盛し、「美人董氏墓誌銘」や「蘇慈墓誌銘」は隋時代の傑作と称され、後の「初唐の三大家（欧陽詢・虞世南・褚遂良）」らに影響を与えた。

蘇慈墓誌銘【そじぼしめい】隋時代・603 年

墓主の蘇慈は、『隋書』などにも伝記が見られる名臣であり、隋の文帝に仕えた。「美人董氏墓誌銘」と同じく隋時代の楷書の傑作と称され、その整斉な楷書は科挙などの受験生の手本にされていた。

智永【ちえい】生没年不詳

隋時代に活躍した僧侶。会稽の人で、王羲之七世の孫。出家後は永欣寺に籠り、30 年にわたり書に精進した。王羲之の書法を伝え、草書に優れたとされる。「真草千字文」が最も著名である。

▶「真草千字文」隋時代

楷書と草書が並列して書かれている。千字文とは、4 文字を 1 句とする 250 句の韻文で、1 字も重複する文字がない。日本の「いろは歌」のように識字用の教材として用いられた。智永が 30 年間寺に籠って「真草千字文」を 800 余本書きあげ、各地の寺に 1 本ずつ寄付したといわれている。そのうちの 1 本が奈良時代に日本に伝わった。王羲之の書法を受け継いだ格調高い書風である。筆脈が途絶えず明確で、線の中にも抑揚があり整った草書の基本形で書かれている。

ColBase：関中本真草千字文

TOP

欧陽詢【おうようじゅん】557-641

隋が滅びた後、唐の太宗に仕え、その才能が高く評価されたことで要職を務めた。虞世南とともに弘文館学士に任ぜられ、書法の指導者としても活躍した。「初唐の三大家」の一人であり、王羲之の書を学んだといわれている。隋時代の整斉な楷書の影響からか、その書風は隙がなく綿密に工夫されている。代表作に「九成宮醴泉銘」や「皇甫誕碑」「温彦博碑」などがある。

▶「九成宮醴泉銘」唐時代・632年

唐の太宗が避暑地の離宮である九成宮を訪れたときに、その一隅から泉が湧き出したことを記念して建てられた碑。政治家の魏徴が文を作り、欧陽詢が文字を書いた。欧陽詢、晩年の作である。縦長で背勢の字形、鋭い起筆と直線的な点画により全体が引き締まっている。点画を等間隔に空けた（分間布白）懐の広い構成が特徴であり、整然とした格調高い書きぶりは楷書様式の完成形を示しているとして、「楷法の極則」と評価されている。

ColBase：九成宮醴泉銘

▶「皇甫誕碑」唐時代・7世紀

隋王朝に仕えた皇甫誕の頌徳碑。碑は断裂や風化による磨滅で現在は文字が欠けているが、字形が整い明快に書かれている。欧陽詢が書いた書の中では最も厳格ともいわれ、細身の線で背勢の構えをとっており、欧陽詢の筆法がいかんなく表現されている。

ColBase：皇甫誕碑（剪装本）

ColBase：皇甫誕碑（整本）

虞世南【ぐせいなん】558-638

欧陽詢とともに太宗に仕え重職を務めた。「初唐の三大家」の一人で、その書は欧陽詢に勝るともいわれている。欧陽詢が背勢の字形であるのに対し、虞世南はやや向勢気味の字形で丸みを帯びているのが特徴である。代表作に「孔子廟堂碑」や「積時帖」などが伝えられている。

▶「孔子廟堂碑」唐時代・628-630年頃

唐の太宗が学問振興のために、長安に孔子を祀る廟を再建したときに建てた記念碑。碑の文も書も虞世南によるもので、晩年の作と考えられている。原石は唐時代に焼失し、その後何度も重刻された。現在西安碑林博物館に安置されているものも、後世の重刻である。力みすぎない自然な運筆や横画や右払いの伸びやかな線、縦長でやや向勢の字形から力強さの中に温和さが感じられる高い品格の書である。文字の左側に寄せられた文字の中心や、長く伸びやかな運筆が右側の空間を強調している。

西安碑林博物館

太宗（李世民）【たいそう（りせいみん）】598-649

唐王朝の第二代皇帝。在位626-649年。国の諸制度を整え、国土を大幅に拡張した。太宗の治世は後に「貞観の治」とよばれ、国が最も安定した時代ともいわれている。王羲之の書を尊重していた太宗は、各地に散在する王羲之の書を国家規模で収集し、褚遂良などの鑑定に優れた役人に整理させ、欧陽詢、虞世南、褚遂良らに「蘭亭序」の複製を命じた。晋時代の歴史書『晋書』を編集した際は、自ら王羲之の伝記を執筆し、王羲之の評価を不動のものとし神格化に導いた。没後は自らの陵墓に「蘭亭序」を副葬するように命じたといわれている。太宗自らも当代随一の能書であり、代表作に「晋祠銘」や「温泉銘」がある。

▶「晋祠銘」唐時代・646年

山西省太原市にある祠に作られた碑で、現存している。高句麗征伐の遠征からの帰路の途中に、神霊に感謝した気持ちを太宗自らの書で書いている。行書でありながら楷書のように整っており、「温泉銘」とは書風が異なる。点画は丁寧に書かれ、整斉としている。

▶「温泉銘」唐時代・648年

晩年に湯治のために驪山温泉に赴いた際、その温泉を賛美した文を太宗自らが書き、石に刻させたものである。原石は失われ、1908年にフランスのペリオが敦煌石窟を調査して発見した拓本が、唯一伝わっている。抑揚のある大きな動きでリズミカルな、気宇壮大な書である。フランス国立図書館蔵。

フランス国立図書館：温泉銘

褚遂良【ちょすいりょう】596-658

太宗から信頼され、虞世南が死去したのちは侍書となった。後の高宗の教育にもあたったが、655年

TOP

に高宗が武則天を皇后に立てることに反対し左遷された。「初唐の三大家」の一人であり、王羲之の書や欧陽詢、虞世南の書を吸収・融合しながら書を学び、これらの書にはない新境地を開いた。代表作に「雁塔聖教序」のほか、「枯樹賦」「伊闕仏龕碑」「孟法師碑」などがある。線は細いながらも躍動的で、閑雅な雰囲気をだしている。

▶「孟法師碑」唐時代・642年

女道師であった孟法師をたたえた碑。直線的で整斉とした楷書の中にも肉厚な点画や隷書の書き方が見られ、堂々とした雰囲気をだしている。

▶「雁塔聖教序」唐時代・653年

玄奘（三蔵法師）がインドから経典を持ち帰り、翻訳した功績をたたえた碑。「聖教序」と「聖教序記」の二基からなり、「聖教序」の文は唐の太宗が、「聖教序記」は皇太子（後の高宗）が作り、褚遂良が書写している。碑は二基とも現在の陝西省西安市にある慈恩寺の大雁塔に安置されている。蔵鋒と露鋒を使い分けた、変化のある巧みな運筆で書かれている。細い線の中にも筆の弾力を生かした抑揚のある、しなやかな線や軽快な運筆、懐の広い字形が特徴である。

ColBase：雁塔聖教序（剪装本）

ColBase：雁塔聖教序（整本）

孫過庭【そんかてい】648？-703？

孫過庭の生没年や名、字、官職などには諸説ある。王羲之の草書をよく学び、文章にも秀でていた孫過庭の代表的な作品に「書譜」が挙げられる。これは、自らの書論『書譜』の草稿である。

▶「書譜」唐時代・687年

孫過庭の書論『書譜』の草稿。唐時代の数少ない肉筆の一つであり、台北の國立故宮博物院に現存している。全て草書で書かれ、文字の大きさや行間は均質で整然としている。筆脈を生かしたおおらかな字形や、線の太細の変化によって立体感をだしている。また、節筆という紙の折り目を筆が横断したことで、節のような筆画となって現れた部分があることも特徴である。清の包世臣は、王羲之の書法をよく伝えるものとして熱愛した。

國立故宮博物院（台北）：書譜

書論 **孫過庭『書譜』**唐時代・687年

孫過庭が著した書論。王羲之を賞賛し、さまざまな能書の比較論や書法、書体論、技法論などについて論じたものである。孫過庭が書いた「書譜」は、理論の面と肉筆で書かれた『書譜』の書の技術が調和していることで、評価が高い。

顔真卿【がんしんけい】709-785

唐の政治家、書家。755年に安史の乱が起こったときは、山東省の平原郡の太守だった。唐王朝への忠誠心の強い顔真卿は、従兄弟らと安禄山軍に抵抗して戦ったが、最終的に反乱軍に捕らえられた。壮年期は張旭の筆法を学んだとされ、欧陽詢、虞世南、褚遂良らと合わせて「唐の四大家」と称される。「蚕頭燕尾」とよばれる起筆が蚕の頭のように丸く、右払いの収筆が燕の尾のように細くなる独特な筆法（顔法）を作りだし、後の書に大きな影響を与えた。代表作に「自書告身」や「多宝塔碑」「顔勤礼碑」「顔氏家廟碑」「麻姑仙壇記」など顔法で書かれた楷書のほか、「争坐位文稿」や「祭姪文稿」「祭伯文稿」などの行書がある。

▶「祭姪文稿」唐時代・758年

顔真卿、50歳の書であり、「争坐位文稿」「祭伯文稿」とともに「三稿」と称される。「祭姪文稿」は、安史の乱で殺された甥の顔季明を悼んだ祭文の草稿である。自由奔放な書きぶりや力強い筆圧、丸みのある線、墨で塗りつぶした箇所などから悲憤の情が感じられ、率意の書の傑作とされる。

▶「争坐位文稿」唐時代・764年

右僕射という立場にいた郭英乂に送った抗議文の草稿。朝廷の集会の際に、郭英乂が席順（坐位）を乱したことに対して、朝廷の権威をないがしろにしたと顔真卿は激しく抗議をした。顔真卿、55歳の書。懐が広く、向勢で扁平な字形や筆の開閉を生かした抑揚のある線、粘り強く息の長い線質などが特徴であり、ゆったりとした運筆からは重厚な味わいが感じられる。

▶「自書告身」唐時代・780年

780年に、顔真卿が太子少師という官職を授かったときの告身（辞令書）で、顔真卿の晩年の書といわれている。「建中告身帖」ともよばれ、肉筆が日

TOP

本に伝わっている。蚕頭燕尾の筆法と向勢の字形が特徴的であり、豊潤で重厚な力強さにあふれている。

懐素【かいそ】725?-785?

俗姓は銭、法名を懐素、字は蔵真と称したとされ、生没年は不明。懐素の伝記は詳しくは伝わっていないが、顔真卿や李白らと交友を持ち、酒に酔い真髄を得た、自然のあり様から書法を得た、などという逸話も残されている。懐素と同様に草書をよくした張旭と合わせて「張顛素狂」と併称される。

「自叙帖」のほかには、草書を中心とした「草書千字文（千金帖）」など肉筆が伝わるが、いずれも真偽に諸説あり、定説をみない。

▶「自叙帖」唐時代・777年

126行の巻子本で、懐素が自らの書について、顔真卿をはじめとする名士たちの詩文などを引用して記している。伝統的な書法を踏まえながらも、書き進めるにつれて文字の大小や太細、連綿など変化に富んだ書で書かれた、自由闊達な作品である。國立故宮博物院（台北）蔵。

國立故宮博物院（台北）：自叙帖

▶「草書千字文」唐時代

懐素が60代後半のときに書いたとされ、一字が千金に値するとたたえられたことから「千金帖」ともよばれる。落ち着いた用筆法で淡々と書かれ、「自叙帖」とは対照的な作品である。

柳公権【りゅうこうけん】778-865

現在の陝西省の出身で、唐王朝の第十五代皇帝である穆宗にその書を好まれた。顔真卿の書に似ていることから後継者と見られていたが、顔真卿よりはやや細く骨張った書風であったことから「顔筋柳骨」といわれた。当時の高官や大臣の家の墓誌や碑は、柳公権の書でないと不孝であるといわれたほど尊重された。代表作に「玄秘塔碑」がある。

▶「玄秘塔碑」唐時代・841年

大達法師の功績をたたえた内容の碑で、柳公権の代表作とされる。碑は、現在陝西省西安市の西安碑林博物館に展示されている。

楊凝式【ようぎょうしょく】873-954

唐王朝などの秘書監などを務めたが、唐の滅亡後は五代の各王朝に仕えた。詩文に優れ、顔真卿の書を学び行書が巧みであったほか、「狂草」にも秀でた。洛陽（河南省）の仏寺などに多く書を残し、続く宋時代の個性的な書への芽生えと見られている。代表作に「韭花帖」などがある。

▶「韭花帖」唐時代

楊凝式の書で、行書7行の手紙。臨摸本などが江蘇省無錫市の無錫博物院などに所蔵されている。また、「三希堂法帖」などにも刻されている。

TOP

淳化閣帖【じゅんかかくじょう】宋時代・992年

北宋の太宗（趙匡義）の命によって作られた、全10巻の法帖。王羲之・王献之の書を中心に数々の名筆を集大成した法帖で、集帖の始まりとされている。この時代は、複製技術の高まりや文房四宝の愛玩が始まり、「淳化閣帖」にも、五代（南唐）の王朝で作られた一流の澄心堂紙や李廷珪の墨が用いられた。

ColBase：淳化閣帖

書論 欧陽修『集古録跋尾』宋時代

欧陽修（1007-1072）が収集した、青銅器の銘文や石碑の碑文などの拓本の解説が述べられている。宋時代は金石の研究が起こり、多くの金石研究の書が著され、『集古録跋尾』はその初期の傑作とされている。ほかに趙明誠が著した『金石録』などがある。

蔡襄【さいじょう】1012-1067

宋の仁宗・英宗に仕えた官僚。蔡襄は顔真卿の書を学んだとされ、その書風は顔法を駆使した豊潤で堂々とした楷書である。代表作に「万安橋記」。蘇軾・黄庭堅・米芾と並んで「宋の四大家」とよばれることがある。

▶「万安橋記」宋時代・1059年頃

泉州（現在の福建省）洛陽江に壮大な石製の洛陽橋が完成した記念碑。橋は後に万安橋と名付けられる。1文字が15cmほどの大きな碑で、蔡襄が自ら文を作って書写した。書風には顔真卿の影響が強く見られ、謹言で勇壮である。

ColBase：万安橋記

書論 朱長文『墨池編』宋時代

漢時代から宋時代までの書論を、朱長文（1041-1100）が体系づけて収録したもの。書論はすでに多く書かれていたが、体系づけて収録したものは『墨池編』が最初である。その内容は、筆法や碑刻、字学など八つに分かれ、それぞれに朱長文の評論が書かれている。このほか、古来の書論を集大成したものとして、南宋の陳思による『書苑菁華』などがある。

蘇軾【そしょく】1036-1101

号は東坡。政治家であり、学者・書家でもあった。詩は宋代第一とされ、書は黄庭堅・米芾と並んで「宋の三大家」と称された。政治家としては政争に翻弄され、政敵によって2度流罪となった。湖北省の黄州に流された際に書いた「黄州寒食詩巻」は、詩も書も蘇軾の最高傑作とされた。

▶「黄州寒食詩巻」宋時代・1082年以後

1080年湖北省の黄州に流され、1082年に寒食節を迎えた感慨を寒食詩二首に表した書。力強く奔放な行書は黄庭堅の跋文とともに、宋代随一の名筆と称されている。

國立故宮博物院（台北）：黄州寒食詩巻

書論 蘇軾『東坡題跋』宋時代

蘇軾の著述や題跋を後の人が集めてまとめたもの。明の毛晋が校訂したものが有名である。全6巻。詩や書、画、文房四宝などについて述べられ、跋文では特に、蘇軾自身が学んだ顔真卿や欧陽修を書技・人格ともにたたえている。

黄庭堅【こうていけん】1045-1105

字は魯直、号は山谷。詩や書に優れ、蘇軾・米芾と並んで「宋の三大家」と称された。王羲之や懐素を学び、規範にとらわれない変幻自在な書を確立した。また、禅にも精通していたことから、禅宗の寺院に影響を与え、墨跡（僧侶の書）には黄庭堅の書風の書が見られるようになった。蘇軾と親交が深く、その様子は「黄州寒食詩巻」の跋文を書いたことからもうかがえる。代表作に、「李太白憶旧遊詩巻」「伏波神祠詩巻」「黄州寒食詩巻跋」「松風閣詩巻」などがある。

▶「李太白憶旧遊詩巻」宋時代

李白の詩を52行にわたり自由闊達に書いている。心の赴くままに自由自在に筆を動かした字形の崩しや、左右に揺らした行、連綿など多様な変化に富んでいる。藤井斉成会有鄰館蔵。

▶「伏波神祠詩巻」宋時代・1101年

劉禹錫の詩「経伏波神祠（伏波神祠を経る）詩」と自跋を各行3～5字、全46行で書いた、全長約820cmの大作。晩年の傑作とされる。永青文庫所蔵。

▶「松風閣詩巻」宋時代・1102年

TOP

黄庭堅が武昌（現在の湖北省鄂州市）を訪れたときに詠んだ詩で、黄庭堅58歳の作。全29行。全長約220cm。國立故宮博物院（台北）所蔵。

國立故宮博物院（台北）：松風閣詩巻

書論 **黄庭堅『山谷題跋』**宋時代

黄庭堅の題跋を集めたもの。詩文や書画など、多岐にわたり書かれて、蘇軾の『東坡題跋』とともに優れた題跋として称される。王羲之や王献之、顔真卿などを高く評価し、技巧にしばられない自由な表現に重きを置いている。

米芾【べいふつ】1051-1107

書や絵画に優れ、後に書画学博士に任命され宮廷の多くの書画を鑑定した。王羲之ら晋時代の書をよく学び、抑揚を利かせた力強い筆使いが特徴であり、代表作に「蜀素帖」や「苕渓詩巻」などがある。蘇軾・黄庭堅と並んで「宋の三大家」と称された。

▶**「蜀素帖」**宋時代・1088年

米芾38歳のときの書で、自作の詩8首を蜀（現在の四川省）で織られた、罫線の入った素（絹）の巻子本に書いたものである。逆筆の起筆を織り交ぜ、筆の弾力を生かした強い線が特徴であり、米芾の最高傑作と称される。國立故宮博物院（台北）蔵。

國立故宮博物院（台北）：蜀素帖

▶**「苕渓詩巻」**宋時代・1088年

米芾38歳のときの書で、自作の五言律詩6首を行書で書いたもの。全34行。故宮博物院(北京)蔵。

故宮博物院（北京）：苕渓詩巻

張即之【ちょうそくし】1186-1266

南宋を代表する能書の一人。禅に親しみ、禅僧と交流があった張即之の書は禅家の間で尊ばれた。日本でも、当時入宋した禅僧たちによって張即之の書が招来され、智積院の「金剛経」や東福寺の「方丈」の額字、「李伯嘉墓誌銘」などが現存している。

▶**「李伯嘉墓誌銘」**宋時代・1088年

邵明仲の書いた文を張即之が書写したもので、全1260字。明時代の項元汴の旧蔵。重要文化財。藤井斉成会有鄰館蔵。

TOP

元時代〈1276年—1368年〉

鮮于枢【せんうすう】1257-1302

元時代初期を代表する書家である。詩賦をよくし、書画に巧みで鑑定にも長けていた。晋・唐時代の楷書、行書、草書を体得し、趙孟頫と並び称された。代表作に、「王安石詩巻」などがある。

趙孟頫【ちょうもうふ】1254-1322

南宋の皇族でありながら、元朝にも仕えた。書画に優れ、宋時代の個性を主張するような書とは一線を画し、王羲之・王献之を頂点とする書を再興させた。代表作に、「前後赤壁賦」や「蘭亭十三跋」などがある。

▶「前後赤壁賦」元時代・1301年

蘇軾の「前後赤壁賦」を書いたもの。伸びやかで美しく、文字や線の抑揚の変化に富んだ表現は、王羲之の書の趣が感じられる。

國立故宮博物院（台北）：前後赤壁賦

▶「蘭亭十三跋」元時代・1310年

「定武本蘭亭序」に、趙孟頫が13種の跋文を書き、「蘭亭序」を臨書したものである。跋文では「蘭亭序」や王羲之を論じるなど、趙孟頫の書に対する考えをうかがうことができる。

ColBase：定武蘭亭序（独孤本）

祝允明【しゅくいんめい】1460-1526

詩文や書に優れ、特に書法は各書体に精通した。趙孟頫に倣い晋・唐時代の書法を体得し、文徴明らとともに「呉中の四才子」と称される。当時、中国第一の商業都市として繁栄していた呉中（現在の蘇州市）では、詩や書画を愉しむ雅なサロンが形成され、祝允明や文徴明をはじめとする多くの文人が輩出された。明時代の初期は、元時代の復古主義を受け継いだ、王羲之などの古典的な書法が尊重された。中期になると、北宋の革新的な書風の影響もみられるようになる。祝允明は、古典的な書風であったが先人の書を幅広く習得し、高く評価された。代表作に「楷書前後出師表巻」や「臨黄庭経」などの小楷、「前後赤壁賦」などの草書がある。

▶「楷書前後出師表巻」明時代・1514年

祝允明は、魏の鍾繇や東晋の王羲之の小楷を習熟した。この作品では、鍾繇の「薦季直表」の温かみのある楷書を吸収し、自らの書風を表現している。

ColBase：楷書前後出師表巻

▶「草書前後赤壁賦巻」明時代

蘇軾の「前後赤壁賦」を書いた祝允明晩年の作。156行、全長約1002cm。狂草で書かれ、祝允明の代表的傑作ともされる。上海博物館蔵。同じ「前後赤壁賦」を62歳のときに書いたものは、東京国立博物館にも所蔵されているが、趣が大きく違っている。

上海博物館：草書前後赤壁賦巻

ColBase：草書前後赤壁賦巻

文徴明【ぶんちょうめい】1470-1559

詩文や書、画に優れ、文人画を完成させた呉中派の大家である。宋・元時代の筆意を学び、後に趙孟頫に倣って晋・唐時代の書法を体得し、祝允明らとともに「呉中の四才子」と称される。明時代を代表する書家で行草書に優れ、智永や王羲之の書法が見られる。また、黄庭堅風の大字や王羲之の小楷などの影響が見られる作品も少なくない。江戸時代には文徴明を代表とする明風の書が、北島雪山らに影響を与え唐様の書が流行した。代表作に「陶淵明飲酒二十首」などがある。

ColBase：陶淵明飲酒二十首

董其昌【とうきしょう】1555-1636

書や画に優れた華亭（現在の上海市松江区）派の大家である。書画の実作のほか、理論にも卓越していた董其昌は、これまでの祝允明や文徴明らのように趙孟頫に倣った書法から脱却し、天真爛漫な書に理想をかかげた。代表作に、「邶風図詩巻」などがある。

ColBase：行草書邶風図詩巻

張瑞図【ちょうずいと】1570-1641

文人で政治家。懐をしぼった字形と鋭い線、険しく勢いのある筆勢からの連綿など独創的な書風を確立した。黄檗宗の帰化僧らによって日本にもその書が伝わった。

王鐸【おうたく】1592-1652

明時代末期から清時代初期を代表する書家・政治家。王鐸は王羲之・王献之の書を絶対視し、「淳化閣帖」や「集王聖教序」を学び、生涯を通じて法帖の臨書に努めた。そして、二王の古法に新たな風を吹き込み、長条幅や横披に連綿を駆使した行・草書をよくしたことで知られている。脱字を気にせず大胆に改変しながらも、法帖の趣をくみ取っているものが多く見られる。明朝の官僚でありながら、後に清朝に仕えたことで蔑視される傾向にあったが、現在ではその評価は高く、特に長条幅形式の連綿草は日本の書道にも大きな影響を与えた。

ColBase：臨大令帖軸

倪元璐【げいげんろ】1594-1644

字は玉汝、号は鴻宝。浙江省の出身で明王朝の官吏。明が滅んだ際に殉じ、忠臣烈士と評される。詩文・書画ともに巧みであった。

傅山【ふざん】1607-1683

字は青竹。山西省の出身で、明王朝の官吏。明が滅んだ後は、道教の道士となって各地を放浪し、清への抵抗を示した。詩文や書画に優れ、博学でもあった。王羲之や顔真卿の書法に精通し、自在な運筆による書風を生み出した。

TOP

金農【きんのう】1687-1763?

字は寿門、号は冬心。「揚州八怪」の一人。当時の揚州は商業が発達し、書画の需要も多かったとされている。官職に就かず、遊歴し 60 歳頃から書画の制作に専念した。活字のゴシック体を筆で書いたような楷書や、刷毛で書いたような隷書など、独創的な書の様式を打ち立てた。

ColBase：隷書六言詩横披

ColBase：漆書格言軸

ColBase：楷書九老図記軸

鄭燮【ていしょう】1693-1765

山東省で県令を務めた後、長らく揚州に住み金農らと交遊し書画の制作に専念した。八分と比べると一分半不足しているという隷書の意で、「六分半書」と自ら名づけた独創的な作風を打ちだした。行・草書も巧みであり、黄庭堅の影響を受けている。「揚州八怪」の一人。

劉墉【りゅうよう】1719-1804

学識が高く、政治家としても要職を歴任し、宰相まで累進した。鍾繇と王羲之を特に習熟し小楷の評価が高く、また帖学派の大家として知られている。濃墨で書かれた肥筆で温厚な書風が特徴である。

翁方綱【おうほうこう】1733-1818

清時代中期の政治家・学者・書家。特に金石考証学において、大きな業績を残した。書では唐時代の書法を学び、欧法を基調とした小楷に優れた。

鄧石如【とうせきじょ】1743-1805

清時代を代表する能書。官職に就かず、父に習った篆書や隷書、篆刻で生計を立て、その傑出した造形や筆法は後世に大きな影響を与えた。清時代は、青銅器や石碑が数多く発見され、それらの銘文の研究が盛んになった。鄧石如はその篆書や隷書、金石学の研究の先駆者であり、鄧石如をはじめとする清時代の能書らによってこれまでにない洗練された表現が開拓された。

上海博物館：篆書軸

伊秉綬【いへいじゅ】1754-1815

詩文・書画・篆刻に優れ、漢碑を広く学んだ。特に大字の隷書に巧みで、その書は、波磔をつくらない方形で壮大な文字の構えが特徴である。行・草書も独自の書風を築き、異彩を放っていた。

ColBase：隷書七言聯

書論　阮元『南北書派論』『北碑南帖論』清時代

碑学隆盛の契機ともなった書論。それまで研究が目立っていなかった、北碑などの六朝楷書や篆書・隷書の碑文に目を向けさせ、後世に大きな功績を残すきっかけとなった書論として高く評価されている。南北朝時代、南朝は帖学、北朝は碑学の書が盛んであったことに由来し、その両派について述べられている。北碑に強い思いのある阮元は、北派をたたえている。『南北書派論』は、南派・北派それぞれの書流の継承について年代順に述べられている。『北碑南帖論』は、書の始めである篆書・隷書、特に隷書に主眼を置き、その書法が南帖・北碑のいずれに継承されているかについて述べられている。

陳鴻寿【ちんこうじゅ】1768-1822

阮元の秘書の一人で書や画、篆刻に優れた。特に「開通褒斜道刻石」などの摩崖を好み、古朴な隷書を得意とした。行草書も整斉とした味わいがあり、篆刻は丁敬らとともに、「西泠八家」に数えられる。

ColBase：隷書八言聯

包世臣【ほうせいしん】1775-1855

清時代を代表する書論『芸舟双楫』の著者として知られる。孫過庭の「書譜」や王羲之などの法帖を習熟し、28 歳のときに揚州にて鄧石如に出会うことで感銘を受け、筆法を授かってからは金石学に向かった。書作においては気満（気力の充実）を提唱し、「逆入平出」の筆法を説いた。

書論　包世臣『芸舟双楫』清時代

包世臣の書論をまとめた芸術論の書。書では、阮元『南北書派論』『北碑南帖論』に続いて北碑を称賛し、その対象をさらに拡大し、碑学の流行にますます拍車をかけた。

TOP

呉譲之【ごじょうし】1799-1870

名を熙載、字を譲之という。官職に就かず、生涯書画や篆刻を売って生活した。特に篆刻を好み、漢印をひたすら模刻し、20 歳のときに見た鄧石如の篆刻作品に衝撃を受ける。それを機に包世臣に師事し、書と篆刻を学び、金石考証学にも深かった。縦長の構えで線の細部まで洗練された篆書の評価が高い。

何紹基【かしょうき】1799-1873

書家・詩人・学者として名高い。学校行政を統轄する学政の官職を務めたが免職され、済南・長沙の書院の主講(学長)を務めた。顔真卿を学んでいたが、包世臣らに出会い金石の研究を始めた。60 歳以後は漢碑の隷書に取り組み、「礼器碑」や「乙瑛碑」、特に「張遷碑」を徹底して臨書した。顔真卿の書法を基本にしながら、北碑の力強さと漢隷の素朴さが加味された行草書も、高く評価されている。

楊峴【ようけん】1819-1896

詩や書に優れ、特に碑学に詳しく漢時代の「礼器碑」を追究した。誇張した波磔に「石門頌」のような趣が見られる構えなど、独自の作風を加え新しい書風を確立した。呉昌碩の師としても知られる。

張裕釗【ちょうゆうしょう】1823-1894

清時代末期の書家。欧陽詢や米芾の書を学び、「張猛龍碑」などの筆法を追究した。数々の書院の主講（学長）を務め、日本の宮島詠士が門弟としてその筆法を伝えた。

徐三庚【じょさんこう】1826-1890

金石学に詳しく、書は篆書・隷書に優れた。特に「天発神讖碑」を追究したが、一方で金農の側筆を加えた繊細な書風も打ち立てた。また、篆刻が巧みで、構成の緻密さや用刀の繊細な強さが特長である。篆刻は初め秦･漢時代の趣を取り入れていたが、後に鄧石如などの鄧派の影響を受けて独自の作風に至った。

趙之謙【ちょうしけん】1829-1884

清時代末期を代表する、書家・篆刻家・画家。最も完成が早かったのは刻印といわれ、陳鴻寿や鄧石如など流派による作風の違いを区別することなく融合した。更に、秦時代の権量銘や漢碑の篆額、貨幣、瓦当などに至るまであらゆる篆書を追究し、多様な刻風を打ち立て、後の呉昌碩などに大きな影響を与えた。書は初め顔真卿を学んだが、包世臣の「逆入平出」の筆法に心酔し、独自の作風も加えて全ての書体にこの筆法を用いた新たな書風を確立した。

楊守敬【ようしゅけい】1839-1915

字は惺吾。湖北省宜都市出身。同治元年（1862）科挙の地方試験である郷試に合格し、黄州府学教授となった。地理学、書誌学、金石学に精通し、書にも優れていた。光緒 6 年（1880）駐日公使の随員として来日した際、1 万余冊の碑版法帖を持参し、日下部鳴鶴や巌谷一六らをはじめとする日本の近代書道に大きな影響を与えた。

呉昌碩【ごしょうせき】1844-1927

名は俊卿、字は昌碩などを用いた。浙江省安吉県に生まれ、幼い頃から書、特に篆刻に熱中し、金石学を追究した。清時代から中華民国にかけて活躍した文人で、書・画・篆刻に優れ、それらが混然一体となった芸術を大成している。また、詩文にも秀でたことから四絶ともいわれた。書では膨大な臨書をもって「石鼓文」に情熱を傾け、その書は日本でも尊重されている。日本の書家や実業家などと書画や篆刻を通じて交流を深め、近代日本書道に大きな影響を与えた。金石・石刻の学術団体である西泠印社の初代社長でもある。

ColBase：臨石鼓文軸

TOP

康有為【こうゆうい】1858-1927

幼少の頃から学問に優れ、儒教や仏教、文学、さらに西欧の学説にも興味を示した。包世臣の『芸舟双楫』に倣って著した『広芸舟双楫』が名著として知られる。漢時代から北魏時代の碑文を特筆し、碑学の啓蒙に努めた。行・草書であっても漢碑の隷書や北魏の楷書の趣が感じられる、粘りのある雄渾な書風が特徴である。

斉白石【せいはくせき】1864-1957

幼い頃から絵を描くことを好んだ斉白石は、中国近代絵画を代表する人物として知られる。書家・篆刻家としても活動を広げ、八大山人や呉昌碩の影響を受けている。各分野の技法や、これまで経験してきたこととの融合が魅力的であると評されている。篆刻では線の片側のみを刻す「単入刀法」で知られ、指物師としての経験がうかがえるギザギザとした豪快な線が特徴である。

郭沫若【かくまつじゃく】1892-1978

文学者・歴史学者・政治家。文学の道を歩んでいたが、毛沢東らと出会い政治活動を行う中で日本に亡命した。その後は古代の研究を深め、金石文や甲骨文の研究で近代日本書道に影響を与えた。

TOP